
見えない光

白桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない光

【Nコード】

N1023BA

【作者名】

白桃

【あらすじ】

2023年 夏

人口300万人ほどの小さな島国であるこの国に、一筋の光が降り注いだ。

異端者の少年はこの光によって親友を失い、この世界に抱いていた不信感を露にし、国のシステムを変えるために奔走する。

それが、自分の身勝手な我が儘と分かっていても。

白光

2023年7月20日、気温が30 を越えた真夏日に「ソレ」は起こった。

「ソレ」は見た者によるとこの世のものとは思えないほど白く、美しく、神々しい光を放ち我が身に降りかかったという。

ある人曰く「天罰」、ある人曰く「粛清」、ある人曰く「選定」…その光は人類にとっては大変な毒であった。しかし、その光がたとえ自分に、家族に、友人に、恋人に死をもたらすほどの苦痛を与えたとしても「ソレ」を非難する者は誰もおらず、むしろ「ソレ」の光によって死に至った者達を、「天から死罪を賜った罪深き者達」と罵り、周りの者は遺骨に触れることも汚らわしいこととして、弔うことも、墓を建てるようなこともしなかったという。たとえそれが生前家族だった、友人だった、恋人だった者だとしても。

今現在では考えられないこの惨状は、しかしこの国では当たり前である。

この国では政治の主権を握るのは国民でも王でもなく、彼らの信じる唯一無二にして絶対の存在である神だけ。

彼らの中では神の存在が第一であり、それ以外のものは二の次だと考える。だから、今回の「ソレ」で亡くなった人が罪人だと思っ
て疑わない。それがどんな罪なのかということは大した問題でもない。

神に殺された者はその時点で、毛ほどの価値もない罪を犯した「信仰心」のない不心得者だったというだけであり、それが自分に近しいものであるほど国民は不快感を露にする。その者が自分にとって神との唯一つの繋がりである「信仰心」を汚す最も強大な悪であるためだ。

また、何千、何万という人々を殺めた「ソレ」はあらゆる建築物を突き抜けて中にいる「罪人」のみを殺した。そのために、人々は

なおさらそれを神の所業と信じて疑わなかった。「ソレ」は20 km²に渡って被害をもたらし、1万5000人ほどの人々が死に至った。これは、人口約200万人のこの小さな国にとつては甚大な被害だが、幸いにもそこが機械化の進んでいた都市であり、「ソレ」が人間以外を破壊することはなかったために、復興は欠けた人員分の都市への派遣のみで済んだ。

そして光を浴びた都市は、神によつて洗浄された「神域指定都市」とされ、この国を代表する機関「神務機関」の本部が置かれることとなった。

異端者の会合

「ソレ」が国に降り注ぐ2日前まで時は遡る。

ここは都市部近郊に位置する、この時代ではかなり珍しい木造の長屋のような建物の中。そこで揺れている影が三つ見えた。

「都市の方の動きが騒がしいな……」

見れば、確かに多くの人々が慌ただしく動きまわっている。およそ10000〜20000人、いや、見えている部分だけでこの有り様ということはもしかしたら1万を越えているかもしれない。しかも、ほぼ全員がかなりの大荷物を持っていることが分かる。

「……皆でつかいバス旅行でも行くんじゃないか？」

17〜18歳ほどの長身の青年の言葉を、同じ年位の小柄な少女は鼻で笑った。

「あんた、本気で言ってるの？ どう考えたってこれは異常事態でしょうが。」

その言葉に青年は肩をすくめて

「んなこたあ見れば分かるさ。けどあんなにでつけー荷物持って忙しそうにしてたら旅行くらいしか思いつかねえ。……いや、もう一個あつたわ……」と何か気付いた様子で返事をした。何か悪い予感がすると、彼の心が告げていた。

政治の主権を彼らの信じる宗教上の神が握り、異常に発展し続けてきたこの国では、国民に課せられた制約がある。

それは一つ、自分が生まれた都市で生活をする、というものである。だからといってその場所にしか居ることが出来ないわけではなく、あくまで生活拠点がそこであれば良いだけの話であり、旅行などはわりと自由にすることができるし、戸籍だけ残しておけばどこへでも行くことが出来る。

だが、国民の中でそれを破るような者はいない。

それはもちろん、彼らの信じる神が定めたからに他ならない。こ

の時点でこの制約は「当然」彼らの中で常識的な義務となった。

つまり、この状況はとてつもなく異常なことなのだ。

その時、沈黙し続けていたもう一人、こちらは15〜16ほどの童顔の少年が顔をあげた。

「きつと届いたんだろう、お偉い神様ってやつから。」

その言葉は、神の存在を小馬鹿にするような意味を含んでいた。

しかし、二人は少年のその言動を気にする様子もない。

「予言か…この有り様だと本部レベルね…」

この国の国民が異常なまでに神を信じ、崇めるのにはいくつか理由がある。その内の一つが、神が行う予言じみた行為である。

予言は重要度によって3段階に分かれ、一番低いものを各地にある国立神殿が、次に重要なものを神務機関支部が、最も重要なものを神務機関本部が受け取り、それが該当する者の戸籍の住所にだけ届けられる。「内容が気になるなあ…久し振りに孤児院に顔出するか？」

青年がそう言うと、他の二人はあからさまに渋い顔をした。

「ユキさんと会うのか…」

少年は大きく溜め息をついた。

「まあ、仕方ないわよね。死ぬよりはマシでしょうよ…」

確か前回の本部の予言は街を一つ飲み干す大津波が来る、というものだったことを思い出し、少女は一層憂鬱な顔をした。

もちろん予言は的中したが、街に住む人々が皆神の予言を信じて迅速に避難したために死者は出ずに済み、被害は最小限で食い止められた。

「…まあ、二言目には神様、神様っていう国民よりは幾らかマシだろうよ。」

青年の言葉に、少年は「確かに」と頷いた。

彼らは別段、ユキという特定の人物が苦手なのではない。普通の国民と違う育ち方をした三人は、それほど神を崇拜してはおらず、「たまに有益な情報をくれる存在」程度の認識しかないために、こ

の国の一部を除く人が皆苦手なのだ。

「とにかく、何だか一刻を争う状況みたいだ。行くなら早くした方がいい。」

青年の言葉に二人は頷き、三人は足早に木造の長屋をあとにして、慌ただしい雰囲気が続く都市へと繰り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023ba/>

見えない光

2012年1月4日00時48分発行